

「心に残る一言」について

—内言と詩的機能の談話論的考察—

沖 裕 子¹

要 旨

人と人の言語交流のなかで産まれる「心に残る一言」という談話の性格について、内言と詩的機能の観点から談話論的に考察する。内言と外言の区別は、ロシアの心理学者ヴィゴツキーの考察によって深められたが、言語学の領域には浸透していない概念である。ヴィゴツキーによれば、内言は自分へのことば、外言は他人へのことばを指すが、言語機能の相違が影響して構造的本性においても内言と外言は異なる性質をもつとされる。

日常の言語生活でありふれて観察される「心に残る一言」の談話範疇的性格を述べれば、発信者の発話が、受信者の内言において定着し、受信者の心内において完結する談話である。談話表現の面では、音調が伴った短い表現で、発信者と受信者が形成してきた社会的・心理的・歴史的な文脈が、重層的に意味を成している談話である。受信者の理解過程で、価値を有した美的経験として感得され、記憶され、受信者の内言世界を再編する力をもつ。これらの表現的性質は、言語がもつ詩の機能とまさに重なる。

キーワード：内言と外言 表現と理解 日本語談話 心に残る一言 詩的機能 個人語
ジャンル 生きる力

1. はじめに

本論では、「心に残る一言」という談話について考察していきたい。従来の研究史において、こうした談話が言語学の考察対象とされたことは管見の限り皆無である。しかしながら、人と人の交流の中で「心に残る一言」をまったくもたないという人はおそらく無く、日常の言語生活においてごくありふれてみられる現象であることから、言語学的談話論の研究対象として考察する必要は十分にあると思われる。

談話研究は、社会学、文化人類学、心理学、文学、言語学からの多様なアプローチが続いている。論者は言語学的談話論に立脚するが、他の領域の知見もとりいれることなしには考察できない領域であると考えている。

談話の定義については、種々の立場がある。言語学的には、語がそうであるように、談話単位を形の観点から定義する試みがなされてきた。こうした立場に対して、談話単位は形の

¹ 信州大学特任教授／名誉教授

面からは定義できないとする立場がみられ、そのひとつに、ロシアの心理学者ヴィゴツキーの談話観がある。レフ・セミノヴィチ・ヴィゴツキー（1896～1934）の著作においてそれは言語観の問題として語られているが、今日の問題意識からみれば明らかに談話単位を対象とした考察として読みなおすことができるであろう。

本論では、氏の最晩年の著作『思考と言語』から第7章「思想と言葉」と第2章「ピアジェの心理学説における子どものことばと思考の問題」をとりあげ、心理学者ヴィゴツキーの言語観をたどるところから始めたい。原著はロシア語であるため、柴田義松氏の訳書（ヴィゴツキー著・柴田義松訳（2001）『新訳版 思考と言語』新読書社）を参照する。以後、本論中、関係個所の引用頁は、同掲書中のものである。

なぜヴィゴツキーの言語観を問題にするかといえ、内言と外言の区別を論じ、心理学的立場から内言と外言の研究にふみこんだからである。ヴィゴツキーは、外言とともに内言を分析の俎上に置いた。そして、子どもの言語発達の観点から、5歳から7歳ごろまでの子どもにありふれて観察される自分自身に語りかける「自己中心のことば」を研究対象とし、次のように説明した。すなわち、ピアジェがそれを内言の不完全な外言化するなわち外言に分類した説に反対し、子どもの「自己中心のことば」の本質は内言であり、纏っていた外言の衣を脱ぎ捨て、内言化する過程への移行を示すことばだと主張している。

さて、日本の言語学においては、研究対象は他者との伝え合いのことばである外言のみが観察対象となり、内言は顧みられることがなかった。言語関係の専門辞典類にも外言と内言の区別は立項されていない²。

音声言語を対象とする言語学においては、音声を伴わない内言は観察方法の工夫が難しく、研究方法上の困難もあったからであろう。

本論では、日常ありふれて観察される「心に残る一言」に焦点をあて、この談話の性格を、言語学的談話論の観点から考察してみたい。内言と外言の境界域にある談話であるという捉え方をするとともに、表現と理解の観点からも、詩の機能を有した日常談話であることを指摘していく。

以下、まずヴィゴツキーの内言と外言についてふりかえる（第2節）。次に、内言と外言という概念のほかに重視されるべき、表現と理解という概念について触れる（第3節）。その後、「心に残る一言」の考察に入る（第4、5、6節）。最後に、今後の課題を述べる（7節）。

2. ヴィゴツキーの内言と外言

2.1 ヴィゴツキーにおける内言と外言の定義

ヴィゴツキーは、内言をどのようなものと捉えていたのか、概観してみたい。

まず、次の2か所を引用する。(1)では、内言は自分へのことば、外言は他人へのことばと

²『日本語学大辞典』『言語学大辞典』『日本語学研究事典』『日本語大事典』『新版日本語教育事典』には、「外言」「内言」ともに見出しも言及もない。『日本語文章・文体・表現事典』では「内言」のみ立項され「外言」は見出し、言及もない。『国語教育総合事典』では、ともに立項されていないが「内言」についてのみ若干の説明がある。『国語教育研究大辞典』では「外言」「内言」が立項される。

したうえで、これら言語機能の相違が影響して、構造的本性においても両者は異なる性質をもつとしている。また、(2)では、外言と内言とは過程としてとらえられること、外言は「思想の言葉³への転化、思想の物質化・客観化の過程（422頁）」であり、内言はその逆の過程であって「ことば⁴の思想への気化の過程（422頁）」であると考えられている。

- (1) 私が自分に話しするのと他人に話しするのとでは、かなりの違いがあるように、われわれには思われる。内言は、自分へのことばである。外言は、他人へのことばである。これらの言語機能におけるこのような根本的・基本的相違が、二つの言語機能の構造的本性に影響をおよぼさずにいると考えることはできない。それ故、われわれには、(略)内言を外言とは程度のうえでのみ異なり、本性のうえでは変りないものと見るのは、正しくないと思われる。(379頁)
- (2) (略)内言は外言に先行したり、外言を記憶で再生するものではないのみか、外言とは反対のものであるということが出来る。外言は、思想の言葉への転化、その物質化、客観化の過程である。内言では、逆方向の外から内へ進む過程、ことばが思想へと気化する過程が問題になる。ここから、外言の構造とはさまざまに異なった内言の構造も生ずるのである。(379-380頁)

また、「内言」あるいは「内語」という用語が、「諸文献において極めてさまざまな現象にあてられている（377頁）」として、次の3つの説明を紹介し、いずれも自身の考える内言とは異なっているとしている。第1に「内言を言語的記憶とする理解（377頁）」、第2に「通常の言語活動の省略。発音されない無音・無言のことば。ことば^{プラス}が、内言とよばれる（377頁から抜粋）」、第3に、もっともあいまいでいちじるしく拡大解釈している定義であり、「発話の運動に先行するすべて、言語活動の内部的側面のすべて（378頁）」が内言と呼ばれているというものである。これら3説に比べると、(1)(2)の説明がどのように異なっているかが分かるであろう。ヴィゴツキーは、「内言はまったく特別の、自主的・自立的な独自の言語機能である（422頁）」としており、「内言が、ことばマイナス音声ではないのとまったく同じように、外言は、内言プラス音声ではない。内言から外言への移行は、複雑な動的変態であり、述語主義的・慣用句的ことばの、構文法的に分化された他人にもわかることばへの変化である（422頁）」と説明するのである。これには、「思想と言葉との関係は、思想の言葉における誕生の生きた過程（432頁）」であり、「思想を欠いた言葉は、なによりも死んだ言葉である（432頁）」として思想と言葉の関係をとらえ、「言語的思考は、複雑な動的全一体（429頁）」とする、形からの定義ではない過程的言語観が背景にあった。

³ 同掲書巻末の訳者注解によれば、「речь」を「ことば」または「言語活動」と訳し、「слово」は「言葉」または「単語」と訳した、とある。ただし、ヴィゴツキーの述べる「単語」が有する意味は、現代の言語学が定説とする現実世界の指し方（切り取り方）をいうのではなく、文脈や話脈によって生じる臨時的意味のゆらぎも含めて考えられている。そうしたゆらぎを包摂させることは、言語観全体の立て方とも密接に関係している。

⁴ 注3に同じ。

2.2 ヴィゴツキーによる子どもの「自己中心的事ば」の考察

前節で述べてきた内言と外言の捉え方は、ありふれて観察される子どもの「自己中心的事ば」の発達心理学的観察を通して得られている。ヴィゴツキーは、子どもの「自己中心的事ば」を「外言から内言への過渡的形式（68頁）」と説明する。事ば⁵はそもそも社会的なものであり、まわりのものに働きかける機能をもつとしたうえで、社会化という観点からみると、子どもの「自己中心的事ば」はコミュニケーションのための事ばの機能を発達させる途上にあるものではなく、外言が本来もっている社会的な事ばの機能から個人的な内言へと移行する過程的動きを示したものと捉えるのである。次の引用箇所がそれを説明している。

- (3) その後の成長の過程でのみ、多様な機能をもった子どもの社会的な事ばは、いくつかの機能の分化という原則に従って発達し、ある一定の年齢で、自己中心的事ばとコミュニケーションの事ばとははっきりと分化するようになる。（中略）子どもが前に他人と話していたのと全く同じようになしかたで自分自身と話しはじめるとき、子どもが自分自身と話しながら、状況がそれをかれに要求するところで、声を出して考えるときにおこる。（中略）発生的関係からいって外言から内言への移行の極めて重要なモメントを見るように思うのである。（67-68頁）

本論では、子どもにありふれてみられる、自分自身と語る「自己中心的事ば」の観察を通じて、内言と外言について考察を深めていった点にも注目したいのである。

3. 表現と理解の非鏡像性について

言語単位である談話を考察する場合、談話の産出としての表現活動が主として注目されてきた。これに対して、解釈、理解、受容などと呼ばれる活動は素朴に、表現活動の逆回し、すなわち鏡像であると捉えられてきたといえるだろう。しかしながら、ヴィゴツキーにおいて内言と外言が別個の機能を持ち、したがって構造的にも異なるとされているように、表現と理解も、別個の機能と構造をもつものと捉えるべきだと考えている。

文芸作品の理解や解釈について論じられることがあっても、表現と理解の言語学的考察は文章論の一部で行われるのみであり、今後の研究の余地が遺されている。談話表現と談話理解は鏡像ではなく（沖2020）、表現と理解を別個の活動として考察すべきことの例証としても、これから述べる「心に残る一言」を位置付けられるかと思う。

「心に残る一言」には、それに対する1語の名づけがない。単語がないということは、語彙体系の対象としては扱えないことを意味する。しかし、それをひとまとまりの談話としてとらえれば、「心に残る一言」という談話は、日常談話としてありふれていることから、考察対象として検討する必要があると考える。

⁵ 言語活動としての外言をさしている。

4. 「心に残る一言」という談話の外延規定

日本語の言語生活において、「心に残る一言」に支えられたことのない人はいるだろうか。人生を支える「心に残る一言」とは、何なのか。この問は、言語学的に問われたことがない。本論では、「心に残る一言」という誰でもが経験する、その意味では日常卑近な言語的体験を、言語学的に説明してみようとする試みである。この問は、観察が困難な内言を記述する試みに包摂される。

日常生活のなかで、人と人が触れ合ったときに生まれるのが「心に残る一言」である。ここでとりあげる「心に残る一言」とは、「心に残る何気ない一言」の謂いである。日常の言語生活場面でありふれて観察され、人と人が対面して会話を行う外言の中から生まれる表現とその受容に限定して用いておきたい。文字言語を読んで受けた印象や、講座等の独話を聴講して得る印象、また、人口に膾炙する慣用表現の受容など、何等かの学習的契機が含まれる談話は、本論で扱う「心に残る一言」談話からは除いて考える。

ちなみに、「心に残る一言」とは、コミュニケーションに用いる音声言語のやりとりの中で受容するものであるが、あくまでもそれが「受信者の心」に残る一言であることは、念入りに定義しておきたい。発信者が、相手の心に残るような一言を意図してことばを用いるか否かは、さほど重要ではない⁶。発信者がそのように意図しても、意図通りに受信者の心に残ることもあれば、残らないこともある。また、仮に発信者の意図通りに受信者の心に残ったとしても、発信者の話し言葉が記号の形そのままに伝達されるとも限らず、形の面では変容を受けることもある。同時に内容面でも、受信者の個別の理解に即した変容を遂げていると考えられる。「心に残る一言」は、受信者においてこそ、生じる現象であることを指摘しておきたい。

さらにまた、「心に残る一言」は受信者の心の中に生き続けるが、その表現形式と意味するところをさらに別の他者に伝達するためには、その一言を説明するメタメッセージの文脈の中で伝えるしかなくなることも、談話的特徴として留意すべき点である。

5. 「心に残る一言」の談話範疇的性格

5.1 受信者の内言に留まる談話

本論が対象とする「心に残る一言」は、日常の会話の中で生まれる談話であった。すなわち、外言における他者との会話を契機として、受信者の心内に形成される談話である。しかし、「心に残る一言」は、会話における次の口頭表現には続かない。受信者の心内に生まれた「心に残る一言」は、原則として個人の内言にとどまる談話である。ここが、対話という外言に属する談話範疇⁷のみを見ていたのでは記述されない特徴だといえる。

⁶ 受信者に価値ある言葉として受容されるには、発信者の言葉そのものにも何等かの力があることは当然であろう。サピア（1998）が、詩は単に様式だけの問題ではなく、「真に深遠な言語表現は、個別言語の、ことばの連合に依存しているのではなくて、あらゆる言語表現の根底にある直観的な基盤に、しっかりとささえられているのだ。（386頁）」と述べている。

「他者との会話から生まれて、受信者の心の中に形成され、かつ、続く会話として外言化されない談話」が「心に残る一言」であるといえよう。

外言として表現されない談話は「心に残る一言」のほかにも、思考や認識を練る途中の談話などにも認められる。しかし、これらは思考過程の途中の談話であるのに対して、「心に残る一言」は、個人の内言として明らかに完成、完結した談話であることが異なっている。内言における完成形でありながら、内言に留まり折に触れて反芻され、原則として他者への伝達が意図されておらず内言として完結しているところに、談話の範疇的特徴が認められる。

ここで指摘したいのは、外言活動から生まれたのち、内言にとどまって練りあげられ、かつ外言への表出が行われない談話範疇の重要性である。これまでの言語学の研究対象は外言であり、教育言語学の観点からもコミュニケーションにかかわる言語力が重要視されてきた。しかしながら、内言にとどまる「心に残る一言」は、個人の言語生活においてはその人の人生の価値を深める大切な談話であり、こうした外言化されない談話範疇は「生きる力」の根幹をなすことに、注目したいと思うのである。

言語学が扱ってきた文レベルまでの単位研究は、価値とは切り離して論じることができる。しかし談話単位の研究は言語使用が対象となるため、人が社会的・心理的・歴史的な存在であることを組み込んだ研究が必至となるのである。ヴィゴツキーの心理学的考察でも価値を組み込んでいる。ハイムズの社会言語学でも、言語使用における社会的影響をモデル化している⁸。言語使用を対象とした言語学的談話単位の研究においては、こうした研究態度を排除しては重要な側面が記述できないことに留意する必要がある。

5.2 メタメッセージでしか伝えられない談話

個人の内言において完成、完結している短い表現をあえて発話してもらい、それを記録しても、受信者本人以外にはその意味内容は立ち現れてこないことも、「心に残る一言」談話の特徴である。「心に残る一言」を談話表現として記録するためには、それをテーマとして、なぜそれが「心に残る一言」だったのかという本人の語りの言説を採集して、それを談話資料として記録するよりほかに、外言としての再現性はないと考えられる。

たとえば、沖（2021）から、次の例を挙げよう。

- (4) 「きれいだなあ」。これは、私の心に残るかけがえのない一言です。父と常念岳と一緒に眺めた春の夕刻に発せられた、一瞬の父の言葉です。今は亡き父の声で、亡き父の言い方で、温かい想いととも、折に触れて私の心の中に響きます。この一言が、父と私の関係性、そして父の世界の見方の重層性と深さを、一瞬にして伝えてくれた言葉なのです。それを発した父が居なくなっても、私自身の心の中に生きつづけています。（2頁）

⁷ 本論が述べる談話範疇とは、ジャンルの謂である。

⁸ ハイムズ著／唐須訳（1979：107）は、「子供は文法体系を獲得する社会基盤の中で、人、場所、目的、その他のコミュニケーションの様式に関して、その使用の体系をも獲得するのである。つまり、伝達事象の全ての要素を、それらに関する態度や意見と共に獲得する」と述べている。

「心に残る一言」は、「きれいだなあ」である。誰かから、心に残る一言は何ですかと聞かれて、「きれいだなあ」だと答えても伝わるものは少ないであろう。その一言が発せられた状況や、それがもつ個人的な意味や価値が説明されなければ、人に語ることはならない。メタメッセージに頼らなければ、「心に残る一言」の意味は外言として他者には伝わらない。

6. 「心に残る一言」の談話表現的性格

6.1 静的に切り取られ意味的重層性をもつ表現

人と人のふれあいの中で一言が心に残るとは、言葉だけが受容されての結果とはいえない。言葉とそれを取りまくすべてが瞬時に知覚され統合されて、世界を構成する唯一の視点である「私」の心に捉えられるのであろう。談話とはモノではなくコトである。言語と言語外現実の両者が同時に結節されており（沖（2010））、しかも、それを受容し表現する個別の個人の認識の内側で営まれる。

談話は、言語単位としては常に動いており、静的なモノとしては捉えにくい。そうした動態の姿を本質とする談話において、一瞬が永遠であるような静的な言語単位として受信者の脳裡に捉えられた言語表現が、「心に残る一言」であると説明できる。

動態的なコトを静的なモノとしてとらえるためには、時間的展開を除去する必要がある。「心に残る一言」は、時間的展開から一瞬の静的時間を取り出した表現として定位することだともいえる。そして、その背後に言語的、非言語的なさまざまな動態的結節を従わせた静的表現だといえる。言語表現の背後までが包括されていなければ、あるいは、その一言が意味的重層性をもって多彩に響く言語表現でなければ、心に残ることはない。

意味的重層性とは、比喩の説明に即した池上（1982：60）の指摘が分かりやすい。引用して示す。

- (5) 「花咲ク」という表現から私たちは特に〈花〉以外の何物をも連想しないでしょうが、「花笑ウ」という表現に接すれば、〈花〉と〈人〉のイメージが重なって感じられます。同じように、「オ空ガ泣イテイルヨ」という表現では〈降雨〉ということが〈人が泣く〉ということと重なります。しかし、「赤チャンガ泣イテイルヨ」という表現から〈雨が降っている〉ということ連想することは、ふつうならまずないでしょう。（中略）基準的な表現とそこからずれとしての比喩的な表現との間に見られるこのような非対照性は、比喩的な表現に対して「曖昧」（文学批評の用語として、二つ以上の意味が重なる状態）であるという特性を与えます。つまり、意味の「重層性」、「内密性」などと呼ばれる状態が作り出されるわけです。

「心に残る一言」は、その一言を刺激語として、その個人がこれまで体験した世界の種々の経験と印象が重層的に重ね合わされることによって、言語的意味の重層性だけではない、現実世界の意味の重層的が喚起されると考えるものである。たとえば先に引用した(4)の「きれいだなあ」は、言語表現としては文芸批評の用語における「曖昧（二つ以上の意味が重な

る状態)」ではない。受容者個人の記憶世界に存在する現実世界の意味が、表現によって重層的に引き出されているのである。

6.2 音調が随伴する短い形式

「心に残る一言」は、文字通りの「一言」であり、短い表現であること。さらに、覚えやすい音調が伴っている。その一言を発した人の声と調子とともにその「一言」が記憶される。

論者は、日常言語における詩を、「心に残る一言」のなかに見出す。

マスメディアが発達した近代において出版される文字言語の詩ではなく、上代中古中世近世の日本文化にみられる顔の知られた集団内の儀礼や交際に関係した詩でもなく、すべての日常言語が基本的にもつ詩の機能を十全に発揮した1例が、「心に残る一言」であると考えられる。

詩は、短く、音調の働きが大きな言語単位である。日本語の俳句を例にとると、一定の音調が伴わない読み上げでは、詩の雰囲気は醸成されない。松尾芭蕉の句「夏草や兵どもが夢の跡」で例示してみよう。やや長いポーズを「(P)」、やや短いポーズを「(p)」と略記し、ピッチの上昇を「で、ピッチの下降を」で記す。このとき、「ナ [ツクサヤツワモノド] モガユメノア」ト」と読んででは俳句にならない。音数律の切れ目に合わせた音調句の句切れと、新たな句立ての音調を伴って、「ナ [ツクサヤ(P)ツ [ワモノド] モガ(p)ユ [メノア] ト」と読むことによって、はじめて俳句は詩となる⁹。

詩は短く、特有の音調で表現されるがゆえに記憶に堪え、そのため心に記憶を刻む記録機能を有するのである。「心に残る一言」は、共同体の集団的記憶と関係をもたなくとも存在し、個人の内的言語生活においてのみ記憶に働きかけ、個人的な記録機能を果たす談話である。

6.3 美的体験

「心に残る一言」は、美を伴っている。美とは、心にひっきり残す印象であり、きらびやかな美しさだけでなく、苦みや辛み等も含めたものである。単に醜いものは美とはいわず、その醜さが心にひっきり残す価値である苦み、辛みのような味わいに昇華していれば美の範疇に入ると考える。「心に残る一言」は、言語が談話表現として有する美を表現する機能、すなわち、美を、あるいは、美として、愉悦を感得するものである。このような意味で、「心に残る一言」は、短く美的な表現である。美的機能を十全に発揮した短く音調を伴う談話は、ジャンルという観点で分類すれば、詩である。「心に残る一言」は、美的機能の点で詩の機能を十全に発揮している。

さらに前述した意味の重層性は、詩が典型的にもつ特色である。詩のみがもつ特色ではないが、よい詩は意味の重層性をよく表現しえるし、またそうした表現に成功しているのがよい詩である。「心に残る一言」は、その一言のなかに、ひとつではない場面、ひとつではな

⁹ 日本語の歌体は音数律を基調としているため、このような説明になるが、言語が異なれば、日常言語における詩の形式も当然ながら異ってくる。先に例にあげた「きれいだなあ」も、詩へと昇華される日本語のプロソディーの原型をそなえている。

い意味内容が、一瞬のうちに、その受信者の内面で、響く表現である。その意味でも、詩的機能を十全に発揮している。この時、その重層性は、受信者個人の体験に裏付けられた意味世界において引き出されていることが重要である。他者と共有してふまえるべき体験や言語的教養は不問に付されている。そのため、何人であれ、その個人の内側に「心に残る一言」が蔵されるのである。

6.4 個人の意味世界を再編する力

「一言」の重層性は個人の意味世界で響く。それは、個人の意味世界を再編する力をもつ談話である。「一言」が、個人の意味世界を再解釈し再編する力をもっていることも、それが詩だからである。散文が個人の認識の再解釈と再編を迫ることに対して、日本語における詩というジャンル、あるいは日本語がまとう詩的機能は、個人の情と、情から引き起こされる行動様式にかかわる意味世界を、再解釈し再編する力をもっている。

池上（1982）は、「比喩の本質は（略）新しい意味作用の創造（64頁）」「読者に対し新しい解釈を要求する（64頁）」と述べているが、「心に残る一言」は、内言のうちにその個人の体験世界を重層的に喚起することによって、その個人自身の体験的意味世界の再解釈と再編を行っているものと考えられる。

池上（1982）は、詩の表現と経験の関係について、こうも述べている。

- (5) 新しい、日常の枠を越えた経験が、新しい、日常の枠を破った詩的な表現を生み出すということはすでに述べました。しかし、実は詩ではその逆も起こることです。つまり、日常の枠を破った新しい表現が日常の枠を越えた新しい経験を生み出すということです。（47頁）

「心に残る一言」は、これと同様の働きをもち、その一言が個人の内で定位された時点で、逆に、その一言がその個人の経験世界の再解釈と再編を行い新しい経験世界を生み出すのである。だからこそ、「心に残る一言」は、その個人にとって「生きる力」を与えられる一言になるのであろう。

「心に残る一言」は他者の発語が出発点にあるものの、それが「心に残る一言」になるのは、受信者の受容活動においてしかない。「心に残る一言」は、受容された個人語のうちに成り立つ、重層性と美を有し、情と行動様式にかかわる意味世界を再解釈・再編する力を有した談話である。

7. おわりに

以上、ロシアの心理学者ヴィゴツキーが深めた内言と外言の区別を言語学的談話論の観点から読み直し、日本語の「心に残る一言」の談話的性格を述べてきた（冒頭要旨参照）。

今後の課題としては、外言と内言の相違、表現活動と理解活動の相違を、正確に把握する必要があるといえよう。なぜなら、「心に残る一言」がそうであったように、内言にも焦点を当て、受信者の受容・理解という過程に着目しなければ分類できない談話があるからであ

る。また、「心に残る一言」は受信者の心内世界を再編し、内言に留まり、そこで完結する談話でもあった。そこで、談話の過程的側面を重視するとともに、言語活動における思考や価値の適切な位置づけも必要になることと思われる。

ちなみに、外言では、表現形式の選択にかかわる話し手の構えが個別言語ごとに異なっており、それが談話表現の特徴の差異につながっていることが明らかになりつつある。沖・姜（2018）、沖・姜・趙（2019）が述べる「談話構築態度」や、認知言語学のいう「主観的把握（construal）」もこうした考え方のひとつであり（池上（2007））、談話管理理論の指摘（田窪（2010））も同様の趣旨の指摘であろう。

本論の分析をふまえれば、談話理解における聞き手の受容態度の構えも、個別言語ごとに異なることが予測される。今後は、内言の対照談話論的分析についても、新たな考察が期待される。

【謝辞】

本研究は、科研費 JSPS 課題番号18K00609の成果の一部である。

本論をまとめるに先立ち、長野・言語文化研究会（2021年3月6日（土）、リモート開催）において、「一言がなぜ心に残るのか：談話の性格と資料性の考察」と題して発表した。席上、有益なご助言を賜ったことに感謝申し上げます。

【引用文献】

- 池上嘉彦（1982）『ことばの詩学』岩波書店
 池上嘉彦（2007）『日本語と日本語論』筑摩書房
 ヴィゴツキー著／柴田義松訳（2001）『新版 思考と言語』新読書社
 沖裕子（2010）「日本語依頼談話の結節法」『日本語学研究』28 韓国日本語學會
 沖裕子（2020）「日本語の形と意味」『信州大学人文科学論集』8(1) 信州大学人文学部
 沖裕子（2021）「出会いの中の光の言葉」『アルプス』114 放送大学長野学習センター機関紙
 沖裕子・姜錫祐（2018）「日本語の談話構築態度—日韓相互の情緒的違和感を説明するモデルの検討—」『日本語学研究』55 韓国日本語學會
 沖裕子・姜錫祐・趙華敏（2019）「日韓中対照からみた日本語の談話構築態度—発想と表現の差を説明するモデルの検討—」『日本研究』50 韓国中央大學校日本研究所
 サビア、エドワード著／安藤貞雄訳（1998）「第11章 言語と文学」『言語—ことばの研究序説』岩波書店
 田窪行則（2010）『日本語の構造—推論と知識管理』くろしお出版
 ハイムズ、アル著／唐須教光訳（1979）『ことばの民族誌—社会言語学の基礎—』紀伊国屋書店

【引用資料】

- 亀井孝・河野六郎・千野栄一（1996）『言語学大辞典』6 三省堂出版
 国語教育研究所編（1991）『国語教育研究大辞典』明治図書
 佐藤武義・前田富祺編（2014）『日本語大事典（上・下）』朝倉書店
 中村明・佐久間まゆみ・高崎みどり・十重田裕一・半沢幹一・宗像和重編（2011）『日本語文章・文体・表現事典』朝倉書店

- 日本語学会編（2018）『日本語学大辞典』東京堂出版
日本語教育学会編（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店
日本国語教育学会（2011）『国語教育総合事典』朝倉書店
飛田良文編（2007）『日本語学研究事典』明治書院

（2021年4月30日受理、5月14日掲載承認）

